

長野市

第33号

人権教育啓発だより

発行
長野市地域・市民生活部
人権・男女共同参画課
長野市大字鶴賀緑町1613番地
電話 224-5032

地区人権研修の一年間を振り返る

変わる地区人権研修

昨年度まで住民自治協議会に推薦を依頼して配置していた人権教育推進員でしたが、その推薦が難しくなってきた地域が出てきたことから、本年度から依頼しないこととなりました。

人権教育推進員が担っていた人権研修は、住民自治協議会の人権教育・啓発担当部門や新たに設置された人権推進パートナー（地区住民を対象に開催される研修会等において、必要な指導・助言または講師を務めるなど事業に参画していただく）などが行うようになるなど、それぞれの地区では、今までの積み重ねを生かしながら、新たな手法で人権教育を進めていただきました。

本年度、当課が作成した講師リストから講師を選定して研修会を行った地域や、区の役員が人権教育推進員に代わって研修会を進めていただいた地区など様々な方法で今までの研修を引き継いでいただいたようです。

DVDの貸し出し状況ですが、年度当初こそ昨年度に比較して減少していたものの、その後徐々に増加していき、11月～1月は昨年度並みの貸し出し数に戻っています。今年度は、事前に何本かDVDを見比べたうえで、研修会で使用するものを決めるという方が例年以上に多かったように感じました。事前にDVDを見ておいていただくことにより、研修会でどんな点に注目して見てほしいか紹介できるようになるなど、より充実した研修会を行うことにもつながったのではないかと思います。

昨年まで年間6回行ってきた人権教育推進員研修に代わって、新たに住民自治協議会や公民館の人権教育担当者、本年度新たに設けられた人権推進パートナーの方々などを対象とした年間4回の「人権教育・啓発担当者研修会」が始まりました。開催回数を昨年度までの人権教育推進員研修会より2回減らした一方、それぞれの研修会の時間を延ばすことにより、研修会の内容や質が下がらないように配慮してまいりました。

社会や私たちの生活の変化等様々な要因により、新たな人権問題が出てきています。そのような状況の中、私たちに求められているのは問題を正しく理解したうえできちんと向き合おうとすることではないでしょうか。そのためには、問題を正確に知ることが何より求められ、人権教育はますます大切になってきているといえるでしょう。地区の人権教育の充実も望まれるところです。

本年度多くの地区が新たな体制で人権研修をスタートさせましたが、その成果と課題を来年度以降につなげていっていただきたいものと考えています。

人権を尊重し合う市民のつどい開催

「第48回人権を尊重し合う市民のつどい」が、12月13日の土曜日、長野市芸術館リサイタルホールで行われました。

令和7年度人権啓発ポスター・標語コンクール表彰式に続いての講演会は、戦場カメラマンでありフォトジャーナリストでもある渡部陽一さんの「戦場からのメッセージをあなたに～ファインダー越しに見た命の現場～」というタイトルで、「カメラマンになったきっかけ」「戦場で出会った子どもたち」「戦場カメラマンという仕事」の3つの内容についてお話しいただきました。

世界各地で今も戦争が起きていること、過去の戦争で使われた化学兵器の後遺症に苦しみ死と向き合っている人たちがいること。それらの犠牲になっているのは、いつも大勢の子どもたちであることなど、戦争の過酷な状況について教えていただきました。15歳の時、その活動を理由に銃撃されたが一命をとりとめ、命がけで女子教育の権利を訴え続け、史上最年少でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんの「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペンが世界を変える」という言葉は、講演を聞かれた多くの方の心に深く刻まれたのではないのでしょうか。



DVDの貸し出し状況から

令和8年1月までの人権啓発DVDの貸し出し数がまとまりました。1月末までの貸し出し総数は、275回でした。

下の表は、本年度貸し出し数が多かったDVDのタイトルとその貸し出し数です。最近の傾向として、様々な人権に関わるDVDの貸し出しが多いことがわかります。認知症や孤独・孤立など高齢者の人権に関わるものやインターネットによる人権侵害も多かったようです。

No.	人権課題	題名	数
1	様々な人権	言葉があるから	23
2	様々な人権	家庭から振り返る人権 話せてよかった	15
3	高齢者	認知症と向き合う	14
4	インターネット	インターネットと人権	13
5	様々な人権	人権のヒント（地域編）	12
//	様々な人権	ハラスメントの裏に潜む無意識の偏見	12
6	様々な人権	人権のすすめⅡ	11
//	高齢者	初めて認知症の人に接するあなたへ	11
7	高齢者	カンパニユラの夢	10

第4回人権教育・啓発担当者研修会(2026年1月20日)の講演記録概要

演題「やっぱり人権同和教育は大切です」

講師 長野県同和教育推進協議会事務局次長 清水 稔さん

忘れてはならない少数者のこと



人権学習で、子どもたちに、「宇宙人が宇宙船に乗って、地球にやってきた。人間を見るのは初めてだが、言葉はわかる。この宇宙人に、人間というものはどんなものか伝えたいとき、どんなことを話しますか」と問題を出すことがある。子どもたちは、「目で物を見る」「2本足で歩く」「耳で音を聞く」「文字を使う」「言葉をしゃべる」などいろいろ挙げるが、だんだん気づいていく。2本足で歩いていない人、何らかの理由で文字を学ぶ機会を奪われ文字を書かない人、しゃべれないけれど手話で豊かな会話をする人など様々な人がいる。人間とはこういうものだと定義しても、そこに当てはまらない人が必ず出てくるものである。

人権の学習では、こうした少数者の人たちのことを想像することが大事だと思う。もしかしたら、その人たちのことを忘れていたり、知らないうちに排除していたりといったことはないだろうか。世の中のある場面では、誰もが少数者になる可能性がある。

なぜ昭和の「丙午の迷信」の影響が

大きかったか

今年は丙午の年だが、この年に生まれた女性は男性を食い殺すという江戸時代から続く丙午の女性を差別する迷信がある。丙午は、60年ごとに回ってくるが、近いところでは明治と昭和の時代にあった。明治の丙午は1906年だったが、全国の出生数として届けられたものが139万人で前後の年より14万人減少している。また、昭和の丙午は1966年だったが、出生数は136万人で前後の年よりも51万人、率で27%も減少した。文化や科学的認識が進歩しているはずの昭和の方が、丙午の迷信の影響が大きかったわけで、間違いだとか差別はおかしいだとか思いながらも、「もし女の子が生まれたら差別を受けるのではないか」と考え、出産をためらう意識がはたらいたと考えられる。迷信を信じていなくても、結果的に迷信を信じたのと同じ行動をとった人が大勢いたと想像される。そして、週刊誌などの情報が全国に拡散するようになった影響の大きさが言われている。

このことは、同和教育や人権教育を進める人たちの間では、昔から話題になっていた。部落差別をする人が、ケガレ意識など誤った情報を得て結婚差別などの差別行為をしてしまう構造に類似していると言われてきた。

ネット社会の渦の中で、丙午の迷信のような根拠のない情報が溢れ、多くの人たちの気持ちが揺れ動いて

しまう時代である。その情報によって困っている人や被害を受けている人はいないだろうかなど、人権の視点で世の中を見ていくことが、今、とても大事である。

人権教育・同和教育との出会い

私は教員として38年間、主に小学校に勤めてきた。教員になった初めての年、小学校5年生を担当した。いじめの被害を受けている一人の女の子がいたが、その子へのいじめを解決できないまま卒業させてしまった。2年間もあったのに。自分の気持ちを抑えきれずに子どもに向き合ったこともあり、すまなかったなと思っている。そのことがずっと心にあり、いつか教員はやめようかと思っていたが、人権教育、同和教育と出会うことにより、これらを柱にしていけば自分も何とか子どもたちに向き合っていけるのではと考え直し、教員を続けてきた。これからする話も、子どもたちに申し訳なかった気持ちや反省を込めながらのものである。

クラスからいじめがなくなることを願って

どうしたら子どもたちのいじめがなくなるのだろうかとずっと考えるようになった。昔、NHKで放映されたアメリカのテレビ番組をヒントに行っている子どもたち向けのワークショップを紹介する。

<ワークショップの概要>

これから、うその話をしますが本当だと思って聞いてください。私は大学で心理学の勉強をしているので、皆さんの目を見ると性格がわかります。今、皆さんの机に青か黄色のどちらかの色紙を置いてあります。実は、青色はあまりいい色ではありません。黄色に比べて暗いですよね。青の人は、つまらないことにくよくよしたり、皆が楽しくやっているのに暗い顔したりして、いいことはありません。それに対して、黄色は明るい色で、これからいいことがあります。

青の色紙が机にある人は立ってください。(青色の子どもたちが立ったあと)立ち方がよくないですね。黄色の人は、楽な姿勢のままでもいいです。青の人にはこれから1週間、放課後掃除をやらしてもらいます。給食はおかわりなしにします。それから休み時間も5分減らします。黄色の人は明るい性格だから悪口や無視はしなないと思いますが、もし黄色の人にそんなことをされても我慢してください。

(少し時間を空けてから)今まで話したのは、間違いでした。実は、黄色は青に比べて、軽はずみな色です。イエローカードは、やっぱりまずいじゃないですか。本当は、青色の方がいい色です。青色は、友達に悪いことをしても反省できるし、物事をじっくり考えられます。黄色の人は悲しんでいる人がいても隣で平気で笑っています。人の気持ちは想像できない、だか

ら黄色はよくないんです。黄色の人、立ちましょう。立ち方からよくないですね。黄色の人は、今日から休み時間を5分減らします。お掃除もやってもらいます。給食のおかわりもなくします。青の人たちはお掃除はやらなくてもいいし、休み時間も増やすことにします。

■ ワークショップに対する子どもたちの反応

子どもたちに話を終えた後、「実は、配った紙はアトランダムに配ったもので、皆さんの個性と全く関係ないものです。人間には物事をじっくり静かに考えるときと、楽しく朗らかに活動するときと両方大事なんだよ」という話をし、その上で立たされたときの気持ちと、座っていたときの気持ちを考えてもらった。

「立っていたときは、『人権の話をするって言っていたのに差別しているじゃないか』と感じたと思います。このときに『いじめや差別はいけないよね』と言われてたら、『絶対許せない。自分はその気持ちはよくわかる。』と思うでしょ。

でも、座っていたときは、『何かひどいこと言っているぞ。でも、自分じゃなくてよかった。』とほっとした気持ちになる。この時は『いじめや差別は許せないよね』と言われても、それほど強くは思わない。クラスや学校や社会の中で、ほっとした気持ちが大きいほど、そして自分じゃなくてよかったという気持ちが大きいほど、いじめや差別は、起きやすく広がりやすいんじゃないでしょうか。」

このような話をすると、納得する子どもたちの表情が見られた。

■ ある小学生の作文から教えられること

（作文の概要）～映画を見たり同和教育推進教員のお話を聞いたりしながら社会科で身分差別の歴史について学習を進めてきた。これらの学習を通して、見て見ぬふりをする人、いじめられているのを見て何もいわない人が絶対に許せないことを学んだ。その一方で、「もし、私が被差別部落の生まれだったとしたら、中学へ行って新しいお友達ができるだろうか」と、とても心配になった。

母親から「私の家は被差別部落ではない」と聞いたときは、正直ほっとしたが、その気持ちこそ差別そのものなんだと気づいた。大きなショックを受けるとともに、差別の勉強をしてきた私が差別をしていたと考えると、自然に涙が出てきた。そんな私の姿を見た母は、「泣いていたって何もできないでしょ。」と厳しく言った。～

人権の学習を積み重ねて、「差別は許せない」という思いや意識が高くなっても、他人事の正義感で考えているときは本物ではない。自然に涙が出てきたのは、部落差別を自分の問題として引き寄せて考えられるようになったからこそと考える。部落差別は被差別部落の中で起きているわけではない。同和地区に行けば、解放運動をしてきた人や差別の中を生き抜いてきた人たちに会うが、そこに差別はない。差別は、被差別部落の外で起こる。私たちの心の中で生まれているのかもしれない。「被差別部落に生まれなくてよかつ

た」の意識は、部落問題を学ぶ中で誰もが通る道かもしれない。心の中にずっと持ち続けるかもしれないこの気持ちと自分とを向かい合わせる経験が大事だと思う。わが子が大事な生き方の学習をしていることを見守り支えた母親の姿も素晴らしい。作文を書いたのはおとなしい感じの子だったが、中学校でクラスの中にいじめが起きたときには、一人一人に声をかけ、仲間と行動して、いじめを解決していったと、中学校の先生から聞いた。1つの人権の問題を深く考えられると、他の問題に対しても主体的に考えていってくれるのではないか。

■ ハンセン病問題について

ハンセン病問題の学習を進めていた時、子どもたちに長島愛生園に入所している女性から匿名の手紙が届き、交流が始まった。

子どもたちの卒業後、私はこの女性に会いに長島愛生園へ行った。施設がある長島は、本州と30メートルしか離れていない瀬戸内海に浮かぶ美しい島であった。この島と本州を結ぶのが長島大橋で人間回復の橋と呼ばれている。療養所の自治会が中心になって17年間の粘り強い運動を続けたことによりこの橋ができた。長い期間を要したのは、島の外からの厳しい反対運動があったからである。

長島愛生園内には静かな住宅地がある。ここには子どもや若者がいない。療養所内の結婚は、断種、子どもを産まないことが条件とされていたからである。女性と会ってから納骨堂を参拝した。亡くなってからも故郷に帰ることができない3,500人の入園者の遺骨が安置されている。「私も、やがてここに入ります」と言う女性の言葉に、何と返していいかわからず沈黙してしまった自分を今も思い出す。

私が長島愛生園を訪問したすぐ後、熊本のホテルでハンセン病元患者への宿泊拒否事件が起きた。ホテル側の不誠実な謝罪に対して、元患者の人たちがその受け入れを断った途端、非難の声が殺到した。元患者の人たちがじっと耐えている時は、「かわいそうに」と涙を流して同情するが、ひとたび人間として声を上げた途端、「権利ばかり主張して」「感謝が足りない」といった非難をぶつける。それこそが差別だということに気づかない。

女性は社会から吹いてくる風を予感し恐れながら、過ごしていたのではないかと感じ、彼女からの手紙を読み返してみた。気持ちを表すのが控えめな彼女の手紙の中に、「信州は何ととっても自分の故郷だが、帰れる若さはもうない。」「私たちはもうやり直しがきかない」という言葉があった。園の外の社会は、そう簡単に自分たちのことを受け入れてはくれないという強い思いがあったのかもしれない。

人間回復の橋の「人間回復」の意味は、元患者や家族の「尊厳の回復」、そして、島の外の私たちの「人間性の回復」であると教わった。つまり、差別をしない人間になるということ、そういう約束の意味があると思う。

性的マイノリティの人権

はじめに

性的マイノリティやLGBTQという言葉がマスメディアなどでも取り上げられるようになり、社会でも定着するようになってきました。一方で、性的マイノリティに対する心の理解は広がっておらず、例えば人権の研修会で、性的マイノリティをテーマにしようとすると、「私の近くにこのような方はいない」とか、「考えたくない」などの言葉が出てきます。男性と女性しかいないという性別二元論の考え方により偏見や差別が根強く残り、当事者の精神的な苦痛となり、自分らしく生きることの障壁になっています。

多様な性のあり方

性的指向は、どういった性別の方を好きになるかということを表す言葉です。異性愛以外に、男性同士とか女性同士の同性愛やどちらの性も愛する両性愛の方向があります。

性自認は、自分がどういった性別として認識しているかという意味があります。体の性別と心の性別が一致している方が多いのですが、これらが一致しない方もいます。以前は、こうした性のあり方を性同一性障害と言っていましたが、世界保健機関が出生時に割り当てられた性別と心の性別が一致しないことは病気でも障害でもないと言いました。

性的マイノリティの方に、暴言などの精神的な攻撃をしたり性に関わる個人情報執拗に聞き出したり了承を得ないで他人に暴露したりするなどのハラスメントが起きていますが、これらはソジハラと言いつバワハラの1つであるとされています。

性の在り方は、私たち一人一人のアイデンティティであり、それを侮辱することは、人権を否定することにもなります。ですから、一人一人が互いの性のあり方を尊重することが大切です。

性的マイノリティの抱える困難

性の在り方は、小学校入学前の5、6歳ぐらいから、遅くとも高校2年生ぐらいまでには判明すると言われています。この時期は、自己肯定感や自尊心を形成する上で重要な時期に当たる学齢期と重なりますが、学校や家庭で理解を得られず相談できる場がなく、性の多様性についての知識も少なくいじめやからかいの対象になることが多く、孤立しやすいというのが現状です。その後の人格形成にも大きな影響をおよぼす可能性も考えられます。

成人期や就労期になると、就職活動では性別の質問が出てきたり、就職しても職場内での無理解だったりなどの困難が出てきます。日本の法律では、同性婚が認められていなく、将来や老後に影を落とします。

日常生活での何気ない会話によるダメージも深刻でもあると言われています。例えば、職場や地域での、「彼氏とか彼女はいるの?」など異性愛を前提とした会話や飲み会の席で、「君はずっと独身だけど、もしかしてあっち系なのか?」などからかいの対象になってし

まうことなどです。

悪気はないのかもしれませんが、日常会話の中でのこうした言動が、性的マイノリティの方にとって大きなストレスになりかねず、このような悩みを抱えながら生活をしているということを知っておくことが大切だと思います。

性的マイノリティの方を受け入れる社会の実現に向けて

社会制度の整備や、理解の促進など、様々な取り組みが進められてきています。代表的なものの1つに、パートナーシップ宣誓制度があります。これは、自治体が独自に性的マイノリティのカップルを婚姻に相当する関係と認めて受領カードを交付する制度のことで、カードを提示することにより、例えば医療機関での付き添いや立ち会いなどが可能になったり、生命保険の受取人にパートナーを指定することが可能になったりします。また、性的マイノリティに関する基礎知識を広げて、国民全体の理解を促すように、国、企業、自治体に努力を求めるいわゆるLGBT理解増進法という法律が2023年に成立しました。

友達からカミングアウトされたら

今まで公にしていなかった自分の性的指向などを本人が他の人に打ち明けることをカミングアウトといいます。カミングアウトする本人は、相手がどう感じるか、どこまで理解してくれるかなどいろいろな不安を抱えており、決して大きな表現ではなく、命がけで行います。そう考えると、自分を信頼してくれて話してくれたことに、まずは感謝の意を示して「ありがとう」と伝えることが大切です。それにより、当事者も安心するのではないかと思います。

注意してほしいのは、本人の了解を得ないで勝手に第三者に本人の性的指向や性自認を暴露するアウトティングの行為です。他人に知られてしまうということによって、居場所を奪われてしまうことにも繋がりがねません。性のあり方は、その人のアイデンティティに関わる問題であり、アウトティングは本人に大きな苦痛をもたらすのです。

私たちに求められること

まずは、多様な性のあり方があるということを知ることが大切です。そのうえで、性的マイノリティの方が身近にいるかもしれないと関心を持つこと。私たちの偏見などによって、生きづらさを感じている人がいるということを理解することが求められています。そして、最も大切なことは、身近にいる当事者の方ときちんと向き合うことではないかと思います。多くの当事者も特別に何かされたいというわけではなく、普通に接してもらいたいと考えています。



性的マイノリティがテーマ DVD[パースディ]